



言 頭 卷

プロ野球のTV観戦に想う

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 若森 堇熙
クミアイ化学工業株式会社 常務取締役 研究開発部長

時々、プロ野球をTV観戦するがその得点シーンは農業開発効率とよくオーバー・ラップする感がある。得点するチームは打撃能力の高い打者の前後が良く働き得点に結び付け、場合によっては大量得点のケースもある。勿論一発ホームランによる得点シーンもあるがその機会は多くは望めないようだ。プロ野球の世界で3割打者、ホームラン打者、高打点打者は強打者といわれその価値は高いが何人も揃えることは難しいといわれている。以前、野球の神様川上哲治氏の講演を聞いたことがある、守備力は訓練次第で上達するが打者には打撃センスがなければいくら訓練しても強打者にはなれないと言が記憶に残っている。また過去強打者を4~5人揃えた球団があったようであるが優勝できなかったケースもあったと聞いている。勝つことは難しいものであるが勝たねば評価されない世界であり企業の生存競争も然り。

鍛えられた守備要員を内・外野の各機能に応じ適正に人員配置する競争相手に、しかも投手が先発、中継、ストッパーと専門化され、時にはワンポイント・リリーフも準備される守備陣に対し得点を勝ち取るには相当な攻撃力（高度な技術力）を必要とする。

打撃センスの上に継続的に鍛練された技術が付加された強打者は我々の農薬開発流に換言すれば感性豊かで新しいノウ・ハウを継続的に蓄積し新剤を生み得る人材に相当し、その位置付けは高い、しかしこのような人材の集合体だけでは勝利に対して疑問が残るのではないか。3割打者は10回の打席で3～4回は成功するが6～7回は失敗しているのが現実であり、ホームラン打者は年間30本達成すれば良しとされている。

るがこの確率はよくわからないがさらに低いと思われ強打者といえども機会損失の方が多いということである。打撃能力の高い者の存在は勝ち戦さに必要なことであるが、得点を効率的に取りチーム（企業）を勝利に導く十分条件とは必ずしもいいきれないのではないか。時々TV画面に唯1本の安打で得点するシーンが映るが選球眼の良い者、足の速い者、進塁さす技術をもつ者等の存在意義は何であるか、おせんでする能力、間を継ぐ能力、あとおしする能力等々に打撃能力が絡んで得点（農業開発効率）が生れ勝利（開発成果）につながるのであってまさしく攻撃力としてその存在価値は極めて重要である。

個人個人に秀いでた多芸を望むのは無理と思う、一芸に秀いでた個々の能力がそれぞれの役割分担に応じ果すべき任務を着実に積重ねれば成果が得られる。さらに臨機応変に適正な人事構成（打順の組換え）により、より速いより高い開発力（得点能力）を意図することも可能となる。そして優勝（企業目標）のために試合開始～終了までの各イニング（開発プロセスの各節目）の目的を明確に意志伝達し、プレーヤーを目的に向けて行動させる統率者・管理者がプレーし易い環境をつくってやりプレーヤーに花を咲かせ、結実させるシナリオを描かせてやること（マネージメント）が肝要と思われる。

農業開発は「山あり谷あり」の経過を辿り厳しいものであるが、これに携わる者は何らかのプロ意識を自負していると思う。とすれば日常の身近にあるプロ集団の意志、動作を目にし、想うことで明るく、楽しく考え、行動し、難関克服の糧にしてみてもどうか。